

『十里霧中』

—— 息子たちのイギリス公立校体験記(2) ——

豊田 一秀

幼稚園の教師をやめた私は、四十半ばにして妻と十四歳と十二歳の二人の息子を連れてイギリスで学生生活を始めている。前回、十月号では息子たちの学校探しから入学許可証が日本に届いたところまでを述べたので、今回は渡英後の生活と新学期の様子等について話してみたい。

八月二日に渡英した私達は、決めておいた借り家に四日に入った。入居時にイベントリーチェックと

いう、備え付けの備品等のチェックが何と二時間に渡ってあって、皿の一枚、窓ガラスの汚れ具合までも確認書に記入されていく。腕白な二人の息子と、そそっかしい妻を思い、少々気が重くなる私であった。まあ、私とて人のことを言えた義理ではないが……。この家はグレイトブックカム (GREAT BOOKHAM) という小さな町にあって、ロンドンから電車で南に五十分程の所である。ここまで来る

と辺りはもう全くの田園地帯となり、この借り家の前も地平線まで広がる麦畑である。

少し落ち着いてから夫婦で学校に挨拶に行った。

学校までは四キロ弱であろうか、道沿いに前庭の広い住宅地や畑が続ぎ、森の中に教会が見える。この景色の中を子どもたちが、毎日自転車を通うことになるのだ。休み中の学校はひっそりとしていて、それでいて子どもの匂いは残っていて、何とはなく虚ろな感じがする。どこの国でも休み中の学校は同じ雰囲気だ。九月の新学期にはこの廊下も子どもたちの歓声にあふれるのだろう、等と一人感じながら事務室に入る。日直の先生に挨拶をした後、新入生のリストに息子たちの名前があることを確認してまずは安心する。二人共、一学年遅らせて欲しいとお願いしておいたのだが、次男の方は籍にゆとりがなく、年齢通りのクラスになるとのことであった。日本では中学一年と中学三年の二人であったが、こちらでは七年生から十一年生まで五学年ある中の八年

生と九年生に編入することになった。入学式のことや、九月までに用意しておくもの等、伺いたいことは山ほどあったが新学期の四日前にもう一度来なさい、その時に校長や担任に紹介しますから話はそこで、ということであったのでその日はすぐに帰ってきた。もっとも渡されていた学校案内に制服をどこで売っているかなどが書かれてあったので、休み中に揃えておくことにする。因みに男子の制服は胸にワッペンの付いた黒のスーツで、ネクタイはクラスによって色の異なるストライプである。女子は同じ黒のブレザーにグレーのミニスカートとなる。

新学期まで、ほぼ一か月の夏休みがあるわけだが、この日々をできるだけのんびりと過ごそうと妻と話す。休み中、イギリスやヨーロッパを旅行することもなく、かと言って九月に備えて英語の特訓をすることもしなかった。「その時に困ればよいことは、その時に困ればよい」と考えていた私たちは、せいぜい近くの町に行って日常のものを揃えたり、

辺りを散歩したりして過ごした。言葉さえよくは通じない、見ず知らずの土地に暮らし始めるのである。家族四人がそれぞれに新しい環境を、「自分の内なるモノ」と思えるようになるのには、各人がこのような「自分の意思で過ごせる時間」を持つことが大切に思われた。それでも銀行、家庭医の登録、車の購入など親は結構忙しかったが、赴任の日から仕事が始まる、企業から派遣されてきた人たちに比べれば格段に恵まれていたと思う。

子どもたちは以前よりも仲良く遊ぶようになり、健康であった。時に少し退屈そうにも見えたが、そんな時は、ひとり、自分の小さい頃の写真やビデオを見たり、学校の卒業アルバムを引っ張り出して来たりしていた。過去の中に「確かさ」を確認しようとする作業のように私には見えた。

新学期の二日前、九月二日に四人で学校に挨拶に行く。子どもたちは、この日初めて校舎内に入った。校舎はレンガ造りの一部二階建て、継ぎ足しを

重ねたタコ足のような建物は日本の公立校と比較して決して立派とは言えない。プレハブの部分もあり、生徒の増加に校舎が追い付いていないのは明らかだろう。ただし、校庭は芝生でその周りは森である。ケンブリッジ出の校長先生は相変わらず穏やかに我々を迎えてくださる。先生曰く、この学校に日本人が入学するのは初めてだそうである。息子たちは約千三百人の生徒の中で唯一の、そして初めての日本人となるわけである。校長先生に挨拶をした後、学年主任を紹介され、クラス名や担任、ホームルーム等を教えられる。子どもたちはほとんど無口であった。緊張しているからだとは分るものの、相手を無視しているからだとは分るもの、何等だと、私は先方の印象が気になってしまう。長男の担任はロマックス先生という美術の若いハンサムな先生で、次男の担任はハーセイ先生という既婚の若いフランス語の先生であった。先生方には、二人はまだほとんど英語を解せないなので、大切な連絡は

メモに書いて渡して欲しいとお願いする。

九月六日、いよいよ新学期の始まりである。九時の始業に間に合うように、余裕を見て八時過ぎに二人して自転車で出て行く。親は来なくてよいというので、妻と二人、玄関で見送る。二台の自転車の後ろ姿を目で追いつつ、一日が無事に過ぎるよう祈る私であった。妻も横で同じような気持ちで自転車を見送っていることが痛いように感じられた。午後四時過ぎに二人、自転車で無事に帰ってくる。長い一日であった。

あまり多くを語らない息子たちであるが、長男の話では、日本の入学式のようなものは全くなくて、クラスに行った後すぐに授業があったこと、授業の中の一つは最初から最後まで何の課題かさえ分からなかったこと、昼は食堂で何とか食べられたとのことであった。食べることが一番大切なのだから、初日から食べられるとは大したものだと私は替りおいておいた。次男は昼食のときに、持って行ったおにぎり

を出したところ、分けてくれと言われたので食べさせると、海苔を「べっべっ」とされたそうで、明日からはサンドウィッチにしてほしいとのことだった。

考えてみれば、二人とも小学校で少し英語の授業があったとはいふものの、長男は二年半、次男に至っては三か月しか英語を勉強していないのだ。さぞかしストレスの多い一日であったであろう。子どもたちに済まないような気がして私たちまで気が重くなってくる思いであった。唯、親がそう思うわりには二人が案外けろっとしているのが救いであった。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

